

プレゼンテーション I 「典礼暦年の霊性」

南雲正晴 (日本カトリック典礼委員会委員)

主イエスが定めた過越の記念

イエス・キリストは過越の聖なる晩餐のとき、愛する弟子たちとともに一つの食卓を囲みました。過越の祭りを行いつつ、ご自身による新たな過越が間もなく成就することを知っていたのはイエスだけでした。パンを裂いて弟子たちに与え、祝福された杯を弟子たちに飲ませた、あの一連の行為の中で、イエスは次のように言いました。「私を記念して、このように行いなさい」。つまり、「主を記念する」ことが典礼の最大の目的なのです。さらに主は、「このように」と方法を示されました。主は、どのようにして記念されることを望んでいるか、その方法までも定められたのです。

考えてみれば、旧約の時代、御父はモーセを通して、ご自分の民イスラエルを約束の地まで脱出させました。そして、それが成就したあかつきには、御父はモーセを通して、この過越を記念して、毎年この季節にこのように行いなさいと、過越の食事を細かく定められました (出エジプト記 12 章参照)。私たちの救い主キリストは今度、ご自分を慕い、受け入れた新しい民である弟子たちを通して、かつて御父が言われたのと同じように、「私を記念して、このように行いなさい」と言われ、目的と方法を伝えたのです。つまりこの方法は、救いの喜びと感謝を、教会が礼拝として歴史の歩みの中で考え出したこと、工夫したことではないのです。教会が見いだしたのではなく、初めから神が定めたことなのです。これは非常に大切なことだと思います。

そしてもう一つ、「行いなさい」という命令についてです。晩餐の席で、主がご自身の記念としてどのように行うかをはっきり語られたように、使徒たちをはじめ、教会は今に至るまで守り続けています。典礼がめざしている最たることは、このことであるはずですが、ですから、主が命じられたことを正しくふさわしく行い、神に栄光を帰するにふさわしい典礼とするためには、主のご意向に沿ったものである必要があるでしょう。パウロは、「わたしがあなたがたに伝えたことは、わたし自

身、主から受けたものです」(一コリント 11・23-26)と、主の晩餐について語っています。使徒としてその晩餐に同席していなかったパウロは、後にその一員に加えられます。けれども、自分も使徒の一人だと言い切ったパウロは、ここでははっきりと、大切なこととして自分自身が主から受けたのだから、あなたたちも大切に行いなさい、と言っています。パウロのこの言葉にもあるように、教会は変わらず、これを大切にしなければならないはずですが、なぜならその方法以外に、御父が御子のうちに成し遂げられた、かつて言葉のしるしによって約束された救い、古いアダムの傷ついた人間性をいやすということはなかったからです。それは、私たちに考えられるような方法ではありませんでした。その意味でしょう、主は、「わたしは羊の門である」(ヨハネ 10・7)、「私は道である」(同 14・6)と言われました。この主は私たちにとって、御父のみ前に立つた一人の方として、まことの祭司、永遠の祭司です。

典礼暦年の中心にある過越秘義

このキリストの名によって、キリストを通して、キリストのうちに、私たちは御父に向かう礼拝ができるようになったのです。その礼拝の頂点にあるのは、『典礼憲章』が繰り返し述べているように、エウカリスチア祭儀です。典礼は主の記念を目的としていますが、その典礼の中でも最も優れた典礼、それがエウカリスチア祭儀です。ですから、入信の秘跡も、ゆるしや病者の塗油の秘跡も、あるいは非常に社会性を伴う秘跡である叙階と結婚の秘跡も、これらは必ず、結びにあたる部分がエウカリスチアをもって構成されています。それを見るだけでも、どれだけエウカリスチアの祭儀を大切にしなければならないかが分かります。

そして、主が、「わたしを記念してこのように行いなさい」と言われたことをどのようにして具現するか、あるいは祭儀化するか、それが具体化して今日のような祭儀になるには、皆さんご存じのとおり歴史がありました。その主の記念の具現

化された祭儀については、「典礼暦年と典礼暦に関する一般原則」の冒頭に書かれています。まず言及されている『典礼憲章』102条には次のように書かれています。「愛の母なる教会は、……救いのみわざを、一年を通して、一定の日に、聖なる想起をもって祝うことを自分の務めとしている。毎週、教会は『主日』と名付けた日に、主の復活を記念し、また、年に一度、復活祭の盛儀をもって主の聖なる受難とともにそれを祝い続けるのである。また、教会は、一年を周期としてキリストの秘義全体を、受肉と降誕から、昇天へ、ついで聖霊降臨日へ、さらに、幸いなる希望と、主の来臨との待望へと展開しているのである」。このような『典礼憲章』の精神をふまえて「典礼暦年と典礼暦に関する一般原則」が作られています。さらに『典礼憲章』は、1年周期で祝うキリスト秘義の祭儀化、つまり救いのみわざをどのように儀式の中で表現するかについて、また祭儀化の中で、キリストに光を当てると必ず見えてくるマリアの存在——逆も然り——についても説明しています。

マリアと聖人の記念

『典礼憲章』からは、マリアの崇敬が重視されていることが分かります。中世から第2バチカン公会議までは、とくにローマ典礼の中に非常に多くの信心業が現れた時代です。マリアに関するミサは数多く作られましたが、神学的には問題のあるものも少なくなく、そうしたものの多くは『典礼憲章』によって整理され、信心業として認められるものが限定されました。これは聖人への信心も同様です。直接的にキリストの救いのみわざを記念する秘跡に向かっているもののみを信心として認めると『典礼憲章』は述べています。こうした精神から、マリアに関する祝い方や崇敬も新たにされました。

同時に、殉教者や諸聖人の記念に対しても教会は忘れていません。キリストの過越のみわざに直接、私たちを代表するかのようにかかわるのはマリアだけではありません。教会はとくに重要な聖なる人である殉教者と、ほかの一般の諸聖人も重んじています。これらが要素となって、一年の暦が構成されています。『典礼憲章』103条は、「聖なる教会は、神の母聖なるマリアを、特別の愛をもって敬う。聖母は、御子の救いのみわざに解き難く結ばれているのである」と、マリアについての精

神を語り、聖人については、彼らは、「天において神に完全な賛美を歌い、われわれのために取り次ぐのである。教会は、聖人の記念日に際して、キリストとともに苦しみ、ともに栄光を受けた聖人において、復活秘義を告げ知らせ……」（104条）と続けています。ここに簡単に紹介した103条と104条をふまえて、「典礼暦年と典礼暦に関する一般原則」に移ります。冒頭の1番は、いくぶんか簡単にはなっていますが『典礼憲章』102条をほぼそのまま引用しています。

暦の構成

具体的なことは各プレゼンテーションの担当者が扱ってくれますが、暦の中心にあるのは「季節」です。第1番目の周期は、主の降誕を中心とした「顕現周期」、つまり神の栄光の現れを記念する周期です。「顕現周期」の基本になるものは、4世紀以降に形成されました。ローマ教会はそのころに、12月25日を主の誕生の日として暦の中に組み込みました。それ以前にはこの祝祭はなく、神の栄光の現れを祝う記念は1月6日のエピファニア（Epiphania）でした。現在でもエピファニアが重要でしょう。この精神、霊性が、降誕節全体の精神を大きく支配しています。もう一つの周期は、四旬節から始まり聖霊降臨の主日で閉じられる「過越周期」です。この季節の「主の過越を記念する」という特徴は、8日ごとの主日を中心に祝い続ける教会の本来の祝い方にあります。それが、3世紀半ばごろから4世紀にかけて、8日ごとだけでなく年周期で、過越の出来事が起きた季節にいつそう盛大に祝おうと、暦の中に組み入れられました。ですから、年周期の復活節は非常に大事なものではありませんが、基本はつねに主日にあるということ覚えていてください。

この2つの典礼季節が、いわば2本の黒柱として一年を支えています。その合間に、顕現周期、過越周期に密にかかわる偉大な聖人の中の聖人、だれよりもキリストを生きた神の母マリアの祝祭日が置かれています。マリアの祝いには12月25日の主の降誕から始まる8日間の中の一つとして、1月1日に祝う「神の母聖マリア」があります。神の母すなわち「マリア・テオトコス」（Maria Theotokos）という有名な言葉があります。この神の母マリアは降誕の8日間の中で祝われますが、それですべてではありません。マリアの祝祭の中

で重要なものは、神の母マリア（1月1日）、マリアの被昇天（8月15日）、無原罪のマリア（12月8日）です。これ以外にも聖母の訪問などマリアに関する祝日はいろいろありますが、とくに重要なのはこの3つです。つまり、マリアの典礼的に重要な点は、その母性（*maternitas*）なのです。これによって、神のわざとキリストの名のもとに御父をたたえるように典礼が構成され、マリアの祝祭も主の重要な季節に関連して置かれています。

それ以外の期間に主日は34あります。この「年間」（*per annum*）中にも、キリストに関する7つの重要な祝祭があります。その中で最初に祝われるのは、主の変容と教会献堂式です。古代からキリスト者は、主にゆかりの地にその信仰表現として重要なバジリカを建てています。至聖所の献堂と主の変容、そして十字架称賛の3つの祝祭日は、東方教会と西方教会に共通した非常に重要な祝祭です。残りの4つはローマ教会だけで祝われるもので、どちらかというとも東方教会からは「なぜそれを祝うのか」と見られることが多いのですが、「イエスのみ心」、「キリストの聖体」、「三位一体」、「王であるキリスト」です。キリストの聖体は6月ごろに祝われますが、その日に子どもの初聖体を行う教会が多いですね。けれども、本来はそれが大事なのではなく、聖木曜日に祝う聖体の制定が原点だということを忘れてはなりません。また、三位一体を祝う習慣は、典礼の発展の中でとくにガリアの教会で強まってきたようですが、ローマ典礼はもともと、主が望まれたように主を記念する、その最も大切な中心であるエウカリスチア祭儀こそ、御父を礼拝する教会の信仰宣言と考えています。ですから、主日ごとに行うエウカリスチアの祭儀の重要性を忘れてはなりません。ローマ教会は11世紀ごろまでミサの中でクレド（*Credo*）を唱えていませんでした。ゲルマンから来たハインリッヒ2世が教皇謁見の際のミサで、ゲルマンではミサのたびに唱えているクレドを唱えないのはおかしいのではないかと教皇ベネディクト8世に指摘したのです（1014年）。ゲルマンは東方教会の影響を受けていました。4世紀のニケア公会議以降、ローマ教皇はミサの中でクレドを唱えていませんでした。教皇はこの指摘を受け入れて、ローマ典礼でも唱えることにしましょう、となったといわれています。しかし、クレドを唱えないからといって信仰宣言をしていないという

のではなく、ミサそのものが、三一の神の偉大な救いのわざの原点が神にあるという信仰の表現だという論点で考えているからなのです。その証拠に、クレドが重要だとしても、ローマ典礼で使われるのは主日と祭日のみです。祝日、平日、あるいは聖人の記念日などには唱えません。

暦の根底にある霊性 “iam sed nondum”

先ほど紹介した『典礼憲章』102条の後半、「一年を周期としてキリストの秘義全体を、受肉と降誕から、昇天へ、ついで聖霊降臨日へ、さらに、幸いなる希望と、主の来臨との待望へと展開している」、これが典礼暦を理解するうえで忘れてはならない心、礼拝の原点です。「待望」、「希望」が暦を構成している精神、霊性、神学です。

資料にはラテン語で “iam sed nondum” と書きました。これは典礼を理解するうえで最も重要な点です。“iam” は「すでに、もう」の意味、“sed” は接続詞「しかし」、そして “nondum” は「いまだ」の意味です。ですから、「すでに、しかしいまだ」ということです。典礼暦年全体が、この精神の下に構成されています。教会の信仰は「待望」です。私たちが確認できる言葉によって約束された神の約束は、必ず実現するという信仰による待望です。“iam” が示す第1の約束は、「わたしは主のはしためです、お言葉どおりになりますように」と言われた、神のわざに対するあの非常に謙遜に満ちたマリアの信仰のゆえに、彼女を母として実現したことを、典礼は顕現周期、とくにエピファニアを中心に示します。

そして、“nondum”（いまだ）は、第2の到来に向けての信仰です。私たちは「すでにもう」“iam”、約束が成就したことを信じています。しかし、後半の “nondum” についてはだれも知りません。「人の子は雲に乗って再び来る」と、イエスは弟子たちに言われました。弟子たちは、「それはいつ起こるのか、どんなしるしがあるのか」ということばかり気にして何度も尋ねています。イエスは、「それはだれも知らない、天使たちも、自分も分からない。御父だけがご存じである」と答えます。ですから、私たちもちろんその時を知りません。けれども御父のみ心にかなう者であるその方が、御父がかかつて約束されたことを成就したのです。だから今度は、その救い主イエスが、新しいイスラエルの民となった弟子たちに約束す

るそれも、同じように必ず実現するという信仰が“nondum”なのです。この2つのことが、典礼を深く理解するうえで重要な点なのです。

この“nondum”とは、待つことです。たとえば、奉献文の聖別の祈り後、司祭は深く一礼し、身を起こしてから「信仰の神秘」と唱えます。これは“iam”をさしています。そして次にこれをふまえて、「主の死を思い、復活をたたえよう、主が来られるまで」と会衆は応えます。「主は復活した、けれども主が来られるまで、やめることなくその記念を続けます」ということです。「主が来られるまで」は、「来られるまで……」であって、「来られるまで。」と句点「。」を置くことができるのは父である神だけでしょう。ですから、ミサは“iam”と“nondum”が微妙に入り混じって構成されているのです。とくに2つの季節を中心に暦を祝い、記念するときには、このことをぜひ念頭に置いてもらいたいと思います。

主の公現の祭日は、日本では早ければ1月2日、遅くても1月8日になりますが、この祭日は、神の顕現を祝う最も重要な点になっています。ここから12月25日の降誕が生まれてきます。また、降誕祭までには“Adventus”（待降節）という準備の期間があります。けれども、一定の時間をかけた私たちの準備が整ったから主がお生まれになったわけではありません。私たちの救い主はベツレヘムの馬屋に、神であるのにマリアとヨセフの手によって飼い葉桶に横たえられます。それがNatale（誕生）の出来事です。“natale”は4世紀までは典礼用語ではなく、殉教者の殉教の日をさす天の国での誕生の日の意でした。それが4世紀以降、キリストのエピファニアの光をベツレヘムの馬屋に当てるため、12月25日が大文字の“Natale”になり、殉教者の死去の日にとって代わり、現代に至っています。“Adventus”には「やって来る」という意味もあります。日本語の「待降」という意味も多少はありますが、これは少し弱い言葉だと思います。言葉としては、「到来」がよいと思います。神の恵みが私たちのもとに「至り来る」、Ad·ventus”です。私たちの方へ向かって迫り来る神の救いなのです。“Adventus”の間、12月25日の“Natale”に向けて準備をするわけですが、この“Adventus”も“Natale”も、実は“Epiphania”が表そうとしていることと同じものです。つまり、顕現周期を記念する私たち

の祝う典礼の中では、どちらも同じものなのです。それほどその結びつきが重要で、3つを別々に記念することはできません。

また、キリストの御からだと御血を祝うキリストの聖体の祭日について残念だと思うのは、その日が独立した祝いのような説教が行われる場合が多いことです。この祭日は本来、聖木曜日からの最も聖なる過越の3日間の典礼を基準として生まれたので、そうした関連づけの中でとらえ、説教することが大切なのです。

教会の祈り

典礼暦年とともに時を記念するもう一つの重要な柱は、聖務日課、“Liturgia Horarum”と呼ばれる「時課の典礼」です。日本の教会では、「教会の祈りの総則」2番の中で、この祈りが教会の祈りであるということを強調していることから、この祈りを「教会の祈り」と呼んでいます。『典礼憲章』26条に、「典礼行為は個人的行為ではなく…教会の祭儀である。典礼行為は教会のからだ全体のものである」という有名な言葉があります。第2バチカン公会議以前、典礼は司祭を中心とする聖職者のものとなっていて、会衆が参列していても、まるでいないかのように行われていました。典礼がラテン語で行われていたため会衆には理解できず、歌も簡単には歌えないようなグレゴリオ聖歌が中心でした。その反省をふまえて、会衆なしに典礼は営めないということに立ち返ったのです。このことは、第2バチカン公会議が新しく発見したわけではありません。古来の典礼には会衆のかかわりがありました。ところが、中世になるほど聖職者だけがかかわるようになっていくのです。同じことは「教会の祈り」にもあてはまります。「教会の祈り」は本来、全キリスト者の祈りであったはずですが、徐々に信徒の手から離れてしまい、司祭や修道者が唱えるものという理解が広まりました。

ローマ教会には6世紀に偉大な聖人ベネディクトが登場し、修道生活が大成されていきます。その中で、「祈り、かつ働け」というモットーが掲げられ、その精神に則って、教会が古くから大切にしてきた詩編を中心とした祈りを分散して、一日を7回に分けて祈り、一日全体を聖とするすばらしい祈りの体系を作りました。こうした祈り方は、とくに観想生活の会の人には可能でしょう。鐘が

鳴れば仕事の手を休め、聖堂で祈ることもできます。けれども、世間で働く人にとっては難しいことです。そのため、聖務日課はしだいに修道者の専有となっていきます。つまり、聖職者以外のキリスト者から祈りが取り上げられてしまったのです。そして 12 世紀代、アッシジのフランシスコのころには、修道者以外に詩編をもって祈ることを禁じたこともあったほどでした。フランシスコは、キリストに従う者になりたいと思ったとき、聖体の秘跡と詩編をもって祈る教会の祈りなくして自分の一日は成り立たないと考えました。そのため、教皇に熱心に願い、教会の祈りを祈ることについて固有に許可を得ました。やがて、聖務日課を唱えるために一冊あればすべて足りるようにまとめられた“*Breviarium Romanum*”が作られました。

主を記念することについて、詩編を祈ることに優るものはありません。教会は、グロリア、クレド、サンクトゥス、セクエンツィアなど、たくさん聖なる歌や祈りを作ってきました。けれども、これらは 150 編の詩編を超えるものではありません。

中世の教会ではグレゴリオ聖歌のみならず多声音楽（ポリフォニー）が発達しましたが、言葉の多い詩編は、しだいにミサの中では使われなくなりました。現在のように「答唱詩編」と呼ばずに「昇階唱」(Graduale)という典礼的でない表現になったのは、詩編が使われなくなったことも大きな要因です。その反省から、第 2 バチカン公会議による刷新ではミサにおける答唱詩編の大切さを説いたのです。そして、ミサ以外でも、過越秘義をもって主を記念することを目的とする教会は、詩編を歌わずして典礼を行うことはできないという原点に立ち返り、すべての信者の祈りとしての「教会の祈り」の大切さが見直されることとなりました。

現代の教会は、典礼暦年と「教会の祈り」を通して「時の記念」の方法を私たちに提示しています。この 2 つの方法の中心に、キリストによる過越の記念を置き、“*iam sed nondum*”の信仰に基づいて典礼を執り行うことが求められているのです。